令和二年 大相撲三月場所

◆大相撲よもやま話◆◆◆

「大阪場所」の変遷

三月場所は「春場所」とも呼ばれ、高校野球の「春のセンバツ」とともに大阪に春を呼ぶ風物詩として親しまれている。三月場所の大阪開催が定着したのは昭和二十八年。そこに至る歴史を振り返ろう。

江戸時代、相撲の全国組織はなく、各地で独自の相撲集団が興行を行っており、「大坂（大阪）相撲」は、江戸（東京）、京（京都）と並ぶ「三都相撲」の一つとして栄えた。明治時代になると、東京相撲が盛況となる一方で、大阪相撲や京都相撲は次第に衰退。京都相撲は明治時代末にはその歴史を閉じた。

東京相撲協会は明治四十二年、常設の興行場としてドーム状の国技館（旧両国国技館）を建設し、大評判となつていた。そこで大阪相撲協会が大正八年、新世界に建設したのが、「大阪国技館」。収容人員は一万人ともいわれたが、復活の切り札にはならなかった。そして大正十四年四月、東京相撲協会が、摂政宮殿下（のちの昭和天皇）の台覧相撲の際に下賜された金一封をもとに賜盃を作成。これを東京だけで独占するのは恐れ多いとの申し出を大阪側が受け入れて東西合併が実現し、昭和二年に財団法人大日本相撲協会（公益財団法人日本相撲協会の前身）が設立された。

東西合併前、東京相撲では、一月と五月の年二回、本場所を行っていたが、合併を機に三月と十月（または九月）に関西本場所を実施して年四場所制とし、大阪のほか京都、名古屋、九州などでも行うようになった。大阪では、昭和二年三月に上本町で、四年三月、五年三月、六年十月に中之島で、仮設国技館を設けて本場所を行っている。

ところが昭和七年に春秋園事件が勃発。改革を訴える幕内力士の約半分が相撲協会を脱退する混乱のなか、八年から関西本場所は中止され、東京だけの年二場所制に逆戻りした。その後、多くの力士は復帰し、双葉山の台頭などで相撲人気は急上昇。それでも年二場所制は変わらず、大阪での本場所は復活しなかった。しかし、本場所に準じる「準場所」は開催された。その舞台として現在の大阪市城東区古市に建設されたのが常設の「大阪大国技館」。ドーム建築で、一説には収容人員は二万五千人もあつたという。十二年六月に「大阪大場所」として興行が行われ大盛況。以後、およそ年二回の開催が続き、館内には優勝額も掲げられた。しかし、戦局の悪化にともない、十五年六月の第七回を最後に、大阪大場所は中断。大国技館は戦時中、倉庫として使用され、戦後には進駐軍の接収後に解体されている。

昭和二十年に終戦を迎えると、戦後の混乱のなか、大相撲は存亡の危機を迎えた。その打開という期待も込め、昭和二十三年十月、福島公園の仮設国技館で、大阪で十七年ぶりとなる本場所（秋場所）が行われた。以後、二十四年十月にも福島公園に、二十五年九月～十月には阿倍野橋に、二十六年九月には難波に仮設国技館を設けて本場所が開催される。

難波の仮設国技館は、交通の便が良かったこともあって大盛況で、この地に常設の大阪府立体育会館が建設されて本場所の会場として使うことになった。二十七年に秋場所も含めた年三場所すべてが東京で開催された後、二十八年三月、完成した大阪府立体育会館の柿落しとして「春場所」が大阪で開催。この年から、一月、五月、九月は東京、三月は大阪の年四場所制となり、やがて七月の名古屋、十一月の九州が加わって年六場所制が確立する。ちなみに、三月場所の通称として親しまれている「春場所」は、以前は長らく、一月場所を指す言葉だった。しかし、二十八年に三月を本場所とするにあたって、三月場所を「春場所」とし、一月場所は「初場所」に変更している。

今年は、それから数えて六十八年目。「三月場所は大阪」「春は大阪」がすっかり定着した。大阪府立体育会館（エディオンアリーナ大阪）は、改装期間中の昭和六十一年に一度だけ中央体育館に譲ったほかはその会場の座を守り続け、数多くの名勝負の舞台となり、「大阪国技館」の名もふさわしいほどの風格を備えている。

昭和十二年に開館した大阪大国技館の館内

現在の大阪府立体育会館の外観

YouTube
日本相撲協会 公式チャンネル

日本相撲協会 公式ハッシュタグ

#sumoday
#大阪場所

観戦したら公式ハッシュタグを付けて投稿しよう！

写真投稿キャンペーン

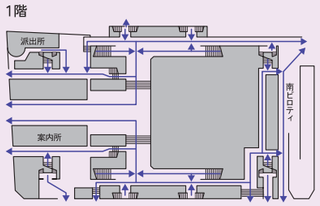
ご注意

場内で物を投げるなど進行の妨げになる行為をした場合は、退場もしくは処罰されますので、ご注意ください。本興行は「相撲競技観戦契約約款」により運営されております。

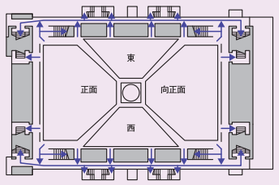
お願い

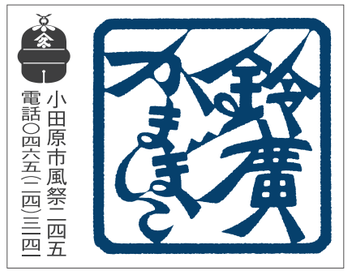
指定観覧席以外へ立ち入ることはご遠慮ください。
緊急事故発生時の非常口および避難方向は下図の通りであります。

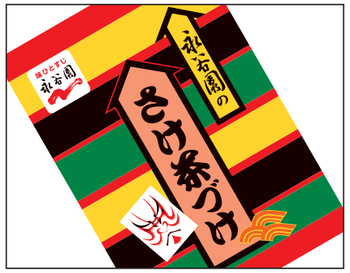
1階



2階







◆大相撲「モノ」語り◆

まわし

十両以上の関取が締めるまわしは三種類ある。稽古で使う、丈夫な木綿製の「稽古まわし」。本場所の取組で使う、色鮮やかな絹製の「締込」。土俵入りで使う、さまざまな意匠を凝らした華やかな「化粧まわし」だ。

まわしの締め方には、風呂敷や折り紙にも通じる、伝統文化の匠がある。三種類とも細長い帯のようにシンプルな形で、例えば稽古まわしの場合、腰に巻かれる部分は縦に四つ折り、股間を隠すあたりは二つ折りで幅広く、尻のあたりや結び目となる端は八つ折りで細くと、巧みに折り方を変え、幅を調整しながら締める。結び目と逆の端は、締込や稽古まわしは折りたたみ、腰に巻いた部分の間に納めるが、化粧まわしの場合は折らずに広げて体の前に垂らす。ここにさまざまな意匠が施されているのだ。

ただし、締込や化粧まわしが持てるのは十両以上の関取だけ。幕下以下の力士は、本場所の取組でも木綿の稽古まわしを締めることになる。しかも、稽古まわしの色は、関取は白だが、幕下以下は黒。関取になって白い稽古まわしを経験した力士も、幕下以下に落ちれば黒に戻る。そんな悔しさが、つらい稽古に励み、関取を目指す原動力となる。

左から
稽古まわし姿、締込姿、化粧まわし姿の貴景勝

◆三月場所の優勝力士◆

大関相星決戦を制して初優勝

朝潮太郎（東張出大関　十三勝二敗）

昭和六十年三月場所優勝

「大ちゃん」の愛称で親しまれた大関朝潮太郎は、昭和五十年代後半から六十年代の土俵を盛り上げた名力士だ。近畿大学時代に学生横綱とアマチュア横綱の二大タイトルを二年連続で獲得し、高砂部屋に鳴り物入りで入門して昭和五十三年三月場所で初土俵を踏むと、一気に幕内上位に進出し、高砂部屋伝統の「朝汐（のち朝潮）」の名を継いで、昭和五十八年三月場所後に大関に昇進。一八三センチ、一八三キロの恵まれた体を生かし、額でガツンと当たって前に出る、迫力満点の取り口に加えて、性格は明るく、コメントもユーモアに富み、人気力士となった。

朝潮は、大阪にゆかりのある力士だった。高知出身だが、進学した近畿大学のある大阪は「第二の故郷」となった。入門後も、土俵人生の節目の出来事は不思議と大阪で起きることが多く、初土俵を踏んだのも、大関昇進を決めたのも、大阪で行われる三月場所。なかでもとりわけ印象に残るのが、昭和六十年三月場所だった。

この場所、優勝候補の筆頭は、直前の一月場所、両国国技館開館の場所を制して二連覇を果たした横綱千代の富士。もう一人の横綱隆の里は初日から休場したため、朝潮は、北天佑、若嶋津、琴風という他の大関陣とともに、千代の富士に次ぐ優勝候補と見られていた。

朝潮は初日、東前頭五枚目闘竜を突き落とし、二日目は西小結出羽の花を吊り出し、三日目は西前頭四枚目逆鉾を寄り切って三連勝したが、四日目は東前頭三枚目鳳凰の小手投げに屈し、五日目は東小結北尾（のち横綱双羽黒）に押し出されて三勝二敗となった。

しかし、ここから快進撃が始まる。六日目に東関脇保志（のち横綱北勝海）を掬い投げで退けると、七日目は東前頭筆頭旭富士（のち横綱）を引き落とし、八日目は東前頭二枚目蔵間、九日目は西関脇大乃国（のち横綱）、十日目は西張出大関琴風、十二日目は西前頭二枚目陣岳をいずれも寄り切って破竹の六連勝。この間、優勝争いは大本命の東横綱千代の富士が五日目に鳳凰、八目には北尾に屈し、一敗の西大関若嶋津と、東前頭十三枚目佐田の海が首位を並走する展開に。気がつけば朝潮は、その二人を千代の富士とともに二差の二敗で追う好位置につけていた。

十二日目、朝潮は一敗の佐田の海を押し出して二敗に引きずり下ろした。すると、もう一人二敗の若嶋津が北天佑との大関対決に敗戦。朝潮は、千代の富士、若嶋津、佐田の海と二敗で首位に並んだ。

迎えた十三日目、朝潮の相手は二敗で並ぶ千代の富士。これまで二度、優勝決定戦で敗れた大きな壁だ。千代の富士有利の声が高かった。しかし、この日の朝潮はいつもと違った。頭で当たって左を差し、右上手をつかむと、迷わずグイグイ前進。粘る横綱を寄り切り、大一番をものにする。この日、同じく二敗同士の対戦で若嶋津が佐田の海に勝ち、二敗の大関二人が首位に並ぶ展開に。十四日目、朝潮は東大関北天佑を上手投げで退け、若嶋津も千代の富士を寄り倒して譲らず、賜盃の行方は、千秋楽、両大関の相星決戦で決することになった。

朝潮はここまで若嶋津を苦手にしていた。対戦成績は六勝十五敗。大関昇進後に限ると一勝八敗と圧倒されている。しかし、右上手を取った朝潮は、左を返して若嶋津に上手を与えず、先手を取って引き付けて出た。左に回りながら下手投げにいく若嶋津。しかし、朝潮は構わず、怒涛の寄りで体を預け、正面土俵に寄り倒し、ついに念願の初優勝が決まった。千代の富士戦といい若嶋津戦といい、第二の故郷・大阪の観客に背中を押されたような迫力ある相撲だった。初土俵から数えて八回目の三月場所で、ついに念願の賜盃を手にした姿に、大阪の観客は大いに熱狂した。

この優勝から四年後、朝潮は引退する。現役生活最後の場所となったのは平成元年三月場所。奇しくもやはり大阪だった。

写真提供（株）ベースボール・マガジン社